

# 生活科学への自然地理学的アプローチ (第3報)

——日常生活に利用される気候・気象に関する文献——

井上啓男・広 正義

## An Approach Based on Physical Geography to Domestic Science ( III )

The Literatures on climate and Atmospheric Phenomena Utilized in Daily Life

Hiroo INOUE and Masayoshi HIRO

### はじめに

生活の近代化が進展した現代において、自然地理の主流と考えられる気候（気象も含め、以下同じ）はますますわれわれの日常生活と密接にかかわりあっている。

昭和59年10月10～20日、気象庁広報室が首都圏と阪神地区の各階層850人余を対象として、気候情報がどの程度利用されているかについてアンケート調査を行った結果では、60%以上が気候情報を、「絶対欠かせない」または「かなり必要」と回答している。利用している時間帯も、起床時から就寝直前までの時間帯に及んでいる。昭和60年3月、民放連が全国47地区2600人の主婦に対して行った「主婦とラジオ」の調査では、主婦がよく聞く番組の中で天気予報は43%で、ニュースの51%に次いで多く、主婦の生活にも天気予報が役立つ情報として利用されていることがうかがえる。

気候情報の利用に際して特に重要なことは、気候の知識を正確に理解すること、利用目的に応じた文献の所在を把握することなどである。著者らは、日常生活に利用される気候・気象に関する文献の所在を探るガイドブックとして昭和56年・61年の2回にわたり文献目録を作成し（名女大紀要、第27号、第32号）報告したが、本稿ではその後刊行されたものと文献検索により新たに見出されたものをあわせて、第3回の文献目録を作成し報告する。

### 文献目録作成の方法ならびに結果と考察

1. 目録作成のため、収書と文献検索を行った。文献検索は国立国会図書館文教調査室・三重県立図書館・名古屋女子大学図書館・三重大学図書館・1987年版日本図書総目録—書名編—（日本書籍出版協会）などを利用して行った。
2. 収書・文献検索した情報は戦後刊行の単行本を主とし、生活にかかわる気候・気象知識を得るための一般的な文献として、どのようなものがあるかという問いに答えるよう心がけた。
3. 収書・文献検索した文献について、文献カードを作成し、配列番号・文献名・著（編）者名・発行所名・初版発行年度（西暦）・総頁数の順に記録した後8分野に分類整理した。（各分野についての意味づけを、第1報・第2報と重複するものは省略し新分野に限って行った。）

#### 4. 分類と整理の8分野.

- (1) 生活一般・産業と経済（経営）・衛生（健康と疾病）・レジャーなどを対象.
- (2) 異常気象・気候変動・気候変化と人間の社会生活とのかかわりを対象.
- (3) 災害・防災を対象.  
(気候・気象災害のほか、昭和59年から気象庁本庁内部部局に火山・地震部が新設されたのに伴い、火山と地震に関するものを加えた.)
- (4) 気候・気象にかかわる文学・歳時記など.
- (5) 気候・気象の歴史に関するもの.
- (6) 世界・日本の気候誌.  
(気候は気候因子の影響で、局地性を現わすことがある。それを知る方法は気候誌の存在である.)
- (7) 気候・気象の調査・教育・行政の内状などを対象.  
(気候・気象情報の利活用に役立つ文献の収集、気候・気象教育—学校や家庭—に有効と考えられるもの、気候・気象行政の知識などについて、その必要性が認識されてきているため.)
- (8) 気候・気象・地象（火山や地震）に関する基礎的知識修得を対象.

#### 生活一般・産業と経済（経営）・衛生（健康と疾病）・レジャーなどを対象

- 201 人間と気候—生理人類学からのアプローチ—：佐藤方彦：中央公論社：1987：210p 蒸し暑いと不愉快になり疲労しやすく作業の効率もおちる。寒いとまた仕事にならない。気温や湿度などの気候条件は人間の活動と深く関係しているということを主題に地球上のさまざまな気象条件のもとで人間がどう環境に適応しているかを探り、人間の進化のプロセスとかさねあわせつつ人間の適応能力を明らかにした書。
- 202 農業気象：三原義秋：地人書館：1961：242p 複雑多岐な農業と気象の関係を体系化し作物・蚕桑・林業等に多面的な影響と作用を及ぼす気象要素の特性を追求、太陽熱利用と農業の今後への指針を示した書。
- 203 農林・水産と気象—気象の利用と改良—：内嶋善兵衛編：朝倉書店：1982：224p 異常気象時代の農林水産業において気象・気候条件および気象情報を利用していかに生産を安定させながら増産を図るかが重要になってきているということを解説したうえ、具体的なデータを中心に気象知識をいかに農林水産業の中で利用するかに的を絞って解説。
- 204 気象と農業生産：坪井八十二著：養賢堂：1986：266p 稲作中心とした農業気象の概説、地形気候や耕地微気候の解説、農業における気象災害に焦点をあて、災害対策をも論じている。さらに、農業気象の調べ方、村の気候の調べ方など実践のための手ほどきも述べてあり、解説はやさしく農業技術者向けの普及書。
- 205 工業気象：荒川秀俊：地人書館：1961：278p 各種工業に用いる水の問題に主力をおき更に湿度、温度、気圧などが生産能率や品質に及ぼす影響とその対策を述べたもの。「併せて予報の応用方法までをも示唆」
- 206 水文気象学：川畑幸夫：地人書館：1961：272p 工業用水資源の充足を目的として各地域の降水を量と質の面から分析し、水資源を合理的、効果的に用いる方法を理論と応用の面から具体的に述べた書。

- 207 建築と気象：渡辺 要：地人書館：1962：240p 建築における室内気象と防災の問題のために、各種気象要素及び自然の威力の影響の解明と、建物に対していかに天候を利用し制御するか等の対策が記述されている。
- 208 建築と気象：松尾 要・坂本雄三・村上周三・鎌田元康・宮田紀元：朝倉書店：1986：240p 建築と気象との様々な局面におけるかかわりについて建築専門外の者にも理解できるよう多数の図表を用いて平易に解説し、太陽熱・風力の利用にもふれている。熱と建築・空気と建築・水と建築・光と建築・建築における太陽熱利用などが内容。
- 209 健康と気象—環境と調和をめざして—：佐々木 隆：朝倉書店：1982：208p 気象が、からだとその健康に及ぼす影響について最近研究が進み、新しい知見が出されている折柄、広い領域にわたるこのテーマを多数の図表とデータを用いわかり易い例を多用し明快に解説。
- 210 登山と気象：大井正一・奥山 巖：地人書館：1967：130p 山の気象の学術的立場を示しその登山技術としての利用と、利用を深化させるための研究的な面についての解説を行った上で、個別の、四季の山の気象、山の遭難気象、山の気象の特徴などを述べた登山家・山愛好者が一読すべき書。
- 211 航空気象学：上松 清・山田直勝・宇津木政雄：地人書館：1960：181p ジェット機時代に対処し、最新の気象研究を総合的に整理、新しい航空気象を平明な文体で詳述した航空関係者にとって決定的航空気象の指導書。
- 212 風の百科—風と空気をつくる—：松下精工編：東洋経済新報社：1986：206p 風と農業・畜産・漁業とのかかわり、風と健康・風と災害など風が身近な生活情報であることを述べながら、風の発生、風の測定、風の力、風の種類、世界の風、日本風、ビル風、台風など風の科学的知識をも織りこんだ風の話題を選びすぐった書。
- 213 気象のリズム：毛利圭太郎：地人書館：1961：215p とくに農村や漁村においては気象の知識や災害に対する心がまえなしには生活できないように、われわれの生活に大きな影響を与えている。日本の気象の一年間の特徴を、月を追って、豊富な写真とともに解説。
- 214 海上気象学：寺田一彦：地人書館：1962：275p 海上気象学総論、航海と気象、水産と気象、波浪、高潮の5章に分け、それぞれの現場での体験の成果を詳述し、気象応用の面と対策の実践的指導書。
- 215 海洋・大気・人間—身近な気象—：冨永政英：共立出版：1984：178p 海洋のふるまい、大気現象のあらまし、海洋と大気のふれあいを主題に、まず大気と海および両者のかかわりを科学的に平易に述べ、ついで常に人を意識しつつ、日常生活の折々に触れる気象や気候災害などについて考察。
- 216 おもしろ気象学—秋・冬編—：倉嶋 厚編：朝日新聞社：1986：197p 秋・冬に現れる気象現象から天気ことわざ、日本各地の秋の天気とくらしについて豊富な写真・図表・データを付して解説。生活に気象を積極的に利用して、快適な生活を過すよう提言。
- 217 気候と人間：高橋浩一郎：日本放送出版協会：1985：219p 気候の知識を生活に利用する研究、気候が社会に及ぼす影響に関する研究など、WMO が中心となって1980年に発足したWCP（世界気候計画）を柱として、社会の各分野と接触しながら学際的問題をとり入れた書。
- 218 気象の事典：浅井富雄・内田英治・河村 武：平凡社：1986：526p 日常生活と密接なかかわりのある気象用語1000項目が収録されている万人必携の気象の百科。天気予報の

精度は向上しているものの、今でも山や海の遭難原因の80%は天候悪化が占めているということから、安全にレジャーを楽しむため、山と海の気象を詳しく解説。

**219 身近な気象の科学—熱エネルギーの流れ—：近藤純正：東京大学出版会：1987：206p**

気象の諸現象を「熱エネルギーの流れ」としてとらえ、その方向への良き入門書である。温室効果・大気中のエネルギー循環・気圧と低気圧の発見・偏西風と波動など、地球全体の気候の成り立ちが説明されている。説明はわかりやすい例をあげながら具体的で簡潔。さらに気象と人間社会の深い関連について、開眼させようと努めていることが、気候と生命・気候と産業という内容からもうかがえる。

**220 雪国新時代—利雪ビジョンの社会づくり—：とやまの雪研究会編：古今書院：1987：286p**

雪を見つめる・雪害は変わる・進む雪対策・雪に暮す—先人の知恵・雪国新時代—雪利用の新たな展開などの章から成る19人の分担執筆。北陸に住んで雪問題を考えている者でなければ指摘できない細かい点にまで執筆者の視点が行き届いている。「北越雪譜—鈴木牧之一」の出版後150年を経て、ようやく、雪国新時代へ入ってきたと思える。工学的な進歩は著しいが、利雪は、発電やスキーなどを除くと、まだ実用の段階にはないことを示唆。

**異常気象・気候変動・気候変化と人間の社会生活とのかかわりを対象**

**221 異常気象：小松左京編：旭屋出版：1974：352p**

南米ペルー沖の“エルニーニョ現象”（海流異変）がわが国における豆腐値上げの原因であったように、異常気象はグローバルに影響を及ぼす。世界はあらゆる面でシームレスにつながり、整然とした因果関係をもつという座談会の記録。気象学・海洋学・食品総合研究・疾病社会史・地球科学などの専門家らが、地球社会に及ぼす異常気象の影響を学際的に語り合っている。

**222 気候変動で農業はどうなるか—食糧危機を考える—：坪井八十二：講談社：1976：212p**

北冷西暑（東北日本冷害と西南日本干ばつの同時発生）の気候変動期に入るわが国のこれからの農業をどうすべきか。農業技術者である著者が食糧自給力の向上をはかる私案を述べたもの。農業への莫大な国家投資の必要性、国民の思い切った食生活の転換など国民の食糧確保は農業最大の使命であることを力説。

**223 気候変動の実態：河村 武編：古今書院：1980：289p**

人間活動の急激な増大が人間環境に影響を与えるようになり、気候変動を起す危惧が生じているということから、全地球規模、モンスーンアジア、極東地域、都市と周辺地域に分けて気候変動の地域性の実態を分析解明した書。

**224 気候変動読本—よくわかる気候変動対策—：気象庁総務部：日本気象協会：1984：70p**

気候変動による農業、エネルギー消費、利水など社会、経済活動に及ぼす影響は今後ますます拡大することが考えられ、気象庁としても積極的な対策をとっている。気候変動対策が始められた背景、人間の社会経済が気候変動の影響を受けていると同時に人間が気候を変えているという問題（CO<sub>2</sub>）など、現在明らかにされた事実について、平易な表現で解説。

**225 21世紀の地球環境—気候と生物圏の未来—：高橋浩一郎・岡本和人編：日本放送出版協会**

：1987：225p 変動期にある地球と人間社会というテーマをベースとして、CO<sub>2</sub>の循環と増加がもたらす気候変化・酸性雨の気候と生態系への影響、その将来・化石燃料消費増加が極氷に及ぼす影響・火山大噴火の気候影響など、人類生存にかかわる諸問題を平易に解説した21世紀への地球環境教書。

- 226 都市の生態学：沼田 真：岩波書店：1987：224p 都市の環境問題のなかで，都市大気と気候についてデータをもとに，住民たちの生活と意識まで，都市の生態を描き出している。都市化と気候，ヒートアイランド現象，湿度の低下，エネルギー使用と湿度，風と大気汚染，植物成長にみる都市気候，自動車排ガスその他汚染物質など都市気候の諸問題を概説。
- 227 大気環境論—気候と人間シリーズ—：河村 武：朝倉書店：1987：152p 大気環境について，たばこの煙，室内の空気汚染などの身近な問題から，都市の大気環境，広域化した近年の大気汚染，グローバルな大気環境問題など，さまざまな規模の大気環境の問題を系統的に整理して，その実態を展望。

### 災害・防災を対象

- 228 防災と気象—気象災害を防ぐには—：宮沢清治：朝倉書店：1982：208p 日本列島に気象災害が多いのはなぜか，またそれを防ぐにはどうすればよいか，防災気象情報の効果的な利用法などについて多数の図表を用い明快に解説。付表に気象災害年表があり防災担当者にとって便がはかられている。
- 229 津波のはなし：三好 寿：新日本出版社：1984：174p 津波の発生・伝わり方・防災対策について，アトランティス伝説の謎の解明など興味深い話をおりこみ，津波を防ぐことはできない，しかしそれをよく知ることによって被害を少なくすることはできる（本文40～56ページの日本海中部地震津波の背景は津波防災の教訓）と津波研究第一人者がわかりやすく解説。
- 230 災害—日本史小百科—：荒川秀俊・宇佐美龍夫：近藤出版社：1985：369p 日本史全体の中で災害だけを各種にわたって通覧できる。地震と噴火・風水害と飢饉・火災・新しい災害の分野に整理して解説し災害対策についても史的回顧から現代の対策へと説き及ぶ。付してある災害史年表は418（西暦）～1985年にわたっており災害調査の資料として有効。
- 231 気象と災害：中島暢太郎：新潮社：1986：198p 室戸，第二室戸などの大台風，2781ミリの大降雨（昭和51年，総降水量日本記録，徳島県），北陸豪雪（昭和38・55・56年）など身近な気象災害から，北冷西暑（夏東北冷害と西日本干ばつが同時発生する現象），寒冷渦（北陸豪雪接近指標）という異常現象について自らの体験に基づいて平易に解説するとともに防災への努力を提言。
- 232 台風物語—記録の側面から—：饒村 曜：日本気象協会：1986：250p 日本気象協会の雑誌「気象」に昭和55年1月号より連載している台風物語のうちNO.1からNO.43をもとに，加筆，部分的に補正してまとめた書。とくに，台風について記録の側面からわかりやすく解説し，日本に接近もしくは上陸した台風の衛星写真や付表を数多く取り入れ，資料面で充実している。少しでも多くの人に台風について正しい理解をしてもらい，台風被害の減少に結びつくことが刊行の趣旨。
- 233 戦後の重大事件早見表：毎日新聞東京本社情報調査部編：毎日新聞社：1987：285p 毎日新聞に報道されたニュースの中から，戦後に起こった重大事件をピックアップし，内容別に15項目に分類，1件ごとに要点を簡潔にまとめたもの。自然災害の項に，台風・地震・火山爆発・風水害・落雷・津波などの発生日，災害名，場所，状況及び被害について記載がある。

- 234 **環境汚染と気象**—大気環境アセスメントの技術—：森口 実・小川 弘：朝倉書店：1987：280p 環境汚染と気象とのかかわりについて極めて实际的に現場で役に立つよう解説。特に風の影響と新しい短時間予測について詳述。大気汚染の予測調査・大気環境アセスメントの手法・日本における環境汚染対策などの内容がある。
- 235 **交通通信と気象**：塩谷政雄：地人書館：1961：231p 風水害や豪雪，凍上の被害実態を追求し，電波と気象の関係を解明，さらにレーダーによる気象状態探知の問題を含めて対策と災害防止の方法が述べられている。
- 236 **大気汚染と制御**：伊東彊自：地人書館：1961：269p 重大な社会問題である工場の廃棄ガス，煤煙，エアロゾール，死の灰など気象との関係，拡散の機構を探究し，制御，測定法，災害対策について詳述。
- 237 **かみなり**：畠山久尚：地人書館：1961：234p 古来から民間に伝承されているかみなりから科学研究の対象としてのかみなりまでを身近なものとして述べ，テレビへの落雷，登山中の落雷，航空とかみなりなどの問題を解明し避雷の心得などの豊富な具体例を興味深く解説。
- 238 **昭和天山**—その誕生と観察の記録—：三松正夫：講談社：1970：268p 昭和天山誕生の現場を目撃した著者が，その生成のすべてを観察した記録。単なる記録でなく，火山活動の全貌を見届けた世界的にも珍しい唯一の貴重な資料である。
- 239 **日本の火山災害**—記録による性格調べ—：村山 磐：講談社：1977：206p 現存する火山（77）は，過去にどんな災害を引き起こしたか。記録によって各火山の災害歴をたどり，あすの危険防止の手がかりを探った火山の災害誌。
- 240 **世界の大災害**—破滅からのレポート—：ジェームス・コーネル・木蔵義守訳：講談社：1977：356p 本書の主要な部分は大歴史の大災害のカタログに当てられている。過去，現在，および未来の災害について述べるとともに人間がどうやって災害を見てとり，それにどうやって対処するかということの記述に努力している。またごく一般的方法で，災害の予防と予知，および災害のもたらすインパクトに対する対策の研究の多くを要約している。
- 241 **地震と火山の災害史**：伊藤和明：同文書院：1977：283p 古記録と大地に刻まれた過去の災害の様子を洗い出し，分析し，そのなかに包含されている現代への教訓を探った災害史書。地震観の変遷—古代から近世まで—，近世の地変史の二部から成り，富士山の宝永噴火や浅間山の天明噴火，善光寺地震と安政江戸地震などについて述べている。
- 242 **火山**—噴火と災害—：伊藤和明：保育社：1981：151p 1980年5月大噴火を起こしたセントヘレンズ山や1977年8月32年ぶりに噴火を開始した有珠山噴火の災害の実情や，有史以来記録のなかった木曾御岳の噴火（1979年10月）などから教訓をひき出すとともに，海嶺型，火山島，島孤型とタイプごとに噴火事例を詳述し，防災のための研究促進を呼びかけている。
- 243 **空白の天気図**：柳田邦男：新潮社：1981：443p 昭和20年9月17日，敗戦後間もない日本を未曾有の暴風雨が襲った。枕崎台風と名づけられている。特に原爆の惨禍から1か月余の広島が著しく，死者・行方不明が2012人と，全国の64%も占めている。人々はどのような災害に巻き込まれたのか綿密な取材によって明らかにされている。
- 244 **海吠える**—伊勢湾台風が襲った日—：三輪和雄：文芸春秋：1982：313p 昭和34年9月26日，名古屋及び伊勢湾臨海工業地帯を直撃し4759人という史上最大の死者を出した伊勢湾

大台風の猛威と遭遇した人々の苦闘，哀しみを描いた都市災害ノンフィクション。

### 気候・気象にかかわる文学・歳時記など

- 245 万葉十二カ月：犬養 孝：新潮社：1986：318p 中国地方（瀬戸内），北陸（富山），九州など古代の面影を今なお残し，歌を偲ばせる地を巡り歩き，万葉びとの心にふれて日本の四季を探った随想集。
- 246 俳句の中の気象学—名句でつづる日本の四季—：安井春雄：講談社：1987：267p 古今の名句220余に詠われたさまざまな気象現象を現代気象学の立場から解説。俳句の鑑賞に新しい視点を示すとともに気象の知識も身につくというユニークな発想。
- 247 雑学お天気おもしろ読本—最新気象用語からことわざ・季語まで—：主婦と生活社編：主婦と生活社：1987：350p 日常生活に役立つ“天気ことわざ”を，雨・風・雲などの気象要素季節ごとに分類した実用書。あわせて，最新の気象観察技術もわかり易く解説し天気予知の知恵とノウハウが詰めこまれている。
- 248 気象歳時記—理科年表読本—：高橋浩一郎：丸善出版部：1986：219p 日常生活にいろいろ影響を与える日本の気象変化について，古くから俚諺として残っているものがある。本書は，“気候をよむ”随想的歳時記で，季節が春，梅雨，夏，秋霖，秋，冬の六季となっているのは類書にはないユニークな発想。

### 気候・気象の歴史に関するもの

- 249 雪ものがたり北越雪譜—原本現代訳—：鈴木牧之原著・浜 森太郎訳：教育社：1980：270p 鈴木牧之の名著「北越雪譜」を簡潔な現代文に書き下したものである。現代訳に当っては原文の格調を留めるよう努力のあとがうかがえるが現代になじまない個所は，例えば尺貫法的表現をメートル法に改めるなど，読解を容易にさせてくれる。鈴木牧之による雪の観察記録，雪国の風俗などを集録。
- 250 北越雪譜のある風景—雪に耐え忍ぶ心—：松岡新也：野島出版：1980：211p 雪国の生活を描いた江戸時代の名著「北越雪譜」の原典の中から40カ所を選び，過去と現在をつないでみせる。「北越雪譜」のを生んだ風土の四季の暮らしを多くの写真版を使って紹介。
- 251 日本の気象史料1：中央气象台・海洋气象台編：原書房：1976：440p
- 252 日本の気象史料2：中央气象台・海洋气象台編：原書房：1976：440p
- 253 日本の気象史料3：中央气象台・海洋气象台編：原書房：1976：440p 飛鳥時代（6世紀末～7世紀初）以来の気候・気象現象に関する諸種の史籍約500点を気象学的に分類し，発生した月日，場所，性質，勢力を記載。第1巻では，暴風雨，洪水。第2巻では雷，旋風，干ばつ，雪，雲，虹などの光象すなわち現象の解説。第3巻では史料の解題が行われている。
- 254 気象学百年史—気象学の近代史を探究する—：高橋浩一郎・内田英治・新田 尚：東京堂出版：1987：230p 近年，いちじるしい進歩を示した気象学の成果を，まず通史として社会の変化のもとに回顧，展望，評価し，つづいて諸学説の背後にある考え方の推移や技術的進展をもたらした経緯を各論として見，あわせて各業績の位置づけが行われている書。

## 世界・日本の気候誌

- 255 **とやまのお天気：富山地方気象台編：北日本新聞社出版部：1974：244p** 風・気温・雨・雪・気象災害・生活と気象など、富山県の気象・地象・水象の諸現象のなかに生きる人々の姿を平易に解説。
- 256 **群馬の気候：山内秀夫編：上毛新聞社出版局：1979：314p** 気象・気候学のあらゆる分野をふまえて、群馬県の気候を詳述。類書は他にもあるが大部分がその県の気象官署による気象・気候要素の分析などを記述の主眼においている。本書は多くの小気候調査の実例が述べてあり、日本の中の群馬の気候という局地気候の新しい成果。
- 257 **名古屋の気候環境－暑さ寒さの原因を探る－：大和田道雄編：荘人社：1980：181p** 名古屋だけでなく濃尾平野全域の四季を理解するうえで、一般人のため書かれた教養書。海陸風の循環系と地形の影響、盛夏の高温域はどこに存在するか、大気汚染も地形と風で地域差が大きい、冬の濃尾平野の“伊吹おろし”は北半球規模でも珍しい強風で風道は名古屋であるなど、小気候の分析が生活に密着している。
- 258 **静岡県のお天気：安井春雄・船津康二・田辺久之：静岡新聞社：1982：254p** 静岡県をとりまく四季折々の気象や風物68項目をわかりやすく解説しながら気候温和の通説が優先している静岡県に科学のメスを入れた書。気象庁が都府県としては全国一の7つという多数の気象官署を抱えているのは、多数の気象警報発令や地震予知体制などから、気候温和地ではあるが同時に気象災害の多発地域でもあるということを強調しその浸透に努めたことが本書の意図。
- 259 **さっぽろ文庫気象事典：札幌市教育委員会編：北海道新聞社：1984：317p** 札幌にかかわる気象を、できるだけ多くの角度から照明をあててみたというのが意図。札幌の四季、札幌の生活（服装のうつりかわり・四季の味覚・寒地住宅）、札幌の都市気候、札幌の交通と気象、さらに、気象とのかかわりとして、円山の動物・植物園の四季、季節商品の仕入れとファッション、北に生きる農作物など、札幌の気象とともにこの地に生きる知恵の一助を果している。
- 260 **風の事典：関口 武：原書房：1985：1000p** 人々の生活や習俗と結びつき、季節や気候で千変万化する風の名を初めて集大成した書。日本には2145の風の名前があり、方位別に、その強弱、寒暖、吹く季節、吹く時間の長短などの特性によって付けられたもので、北海道から沖縄まで全国津々浦々の風の名を分類・解説した風の百科辞典。
- 261 **日本の気候：中村和郎・木村竜治・内嶋善兵衛：岩波書店：1986：237p** 地球規模の大気現象がどのように日本の気候に反映し、各地に特徴ある現象を生みだしているかを、日本と世界の他地域の類似現象と比べながら、多数の図表を用いて書かれた現代的な日本気候誌。
- 262 **アジアの気候－世界気候誌第1巻－：畠山久尚：古今書院：1964：577p** 中国とその周辺、東南アジア、インド、パキスタンとその周辺、西アジア、ソ連についての気候誌と気候表。従来の気候表が平均値のみの記述で平板的であったのに対し本書は動気候学的な研究成果を取り入れ、各気候要素の変動性と相互の関係が重視されており、気候表の地点も900をこえ、アジア気候誌としての詳細は他に類例がない貴重書。
- 263 **アフリカの気候－世界気候誌第2巻－：倉嶋 厚・河村 武他共著：古今書院：1973：636p** アフリカ各地域の気候資料の解説とアフリカ各地の気候表の二つで構成されてお



り、月別の平均気温・湿度・降水量・雲量・気圧等の気候表は研究者のみでなく、貿易実務者などアフリカ経済にかかわる人々には必見の書。

### 気候・気象の調査・教育・行政の内状などを対象

- 264 気象調査法：朝倉 正・新田 尚・立平良三他：朝倉書店：1983：272p 気候・気象調査への取組み方，基礎知識，調査法，まとめ方・発表に至るまで実例を中心に問題点を整理し，きわめて实际的にまとめられている。
- 265 気候資料利用案内：気象庁気候変動対策室：気象庁：1983：260p 気象庁気候変動対策室が編集・作成したもの。気象庁内各課の協力を得て，気象庁が保有している磁気テープ・印刷物・マイクロフィルムの三つの形態の資料219件が収録されている。気象庁内各部が保有する資料を総合的にまとめた利用案内書。
- 266 気候資料利用案内－気象台・測候所編－：気象庁気候変動対策室：気象庁：1985：283p 気象庁本庁以外の気象管署（各気象台・測候所）が保有する資料利用案内書。地域的な気候調査にきわめて有効な資料で，各気象管署自体で作成した定期的な刊行物や災害についての資料の他に，部外から収集した資料も含まれている。
- 267 天気情報の見方：立平良三：岩波書店：1987：193p アメダス，気象衛星「ひまわり」などの観測網とコンピュータの利用によって精度は大きく向上したにもかかわらず，なぜ天気予報ははずれることがあるのか，などの疑問に答えながら，今日の情報化社会のなかで，毎日さまざまなマス・メディアから送り出される天気情報の見方を提言。
- 268 理科年表読本気象データマニュアル：中村 繁・北村幸房：丸善出版部：1987：204p 最近，日常生活・各企業で気象データを上手に使いこなすことが必要となってきた。気象データの意味を深く知りたい・ビジネスに気象統計を利用したい・気象データ利用の手引き書を求めているなど，気象データを使いこなすことが必要な人のために理科年表気象部の100%利用を狙ってまとめたデータ入門書。
- 269 気象情報の利用－新しい応用気象学－：関根勇八・酒井俊二：東京堂出版：1987：186p 人間の社会生活や経済活動に対して，短期的，長期的に大きく影響する異常気象や気候変動に関する気候・気象情報には，近年，社会の関心が高まり，農業・エネルギー産業・水資源・生気象・産業の各分野やさまざまな活動計画に適した情報の有効な利用法を求める声が強まっているという視点から情報利用の要望に応えた解説書。
- 270 教養の気象学：日本気象学会（教育と普及委員会）：朝倉書店：1980：232p 日本気象学会が気象教育普及のために編集したもの。気象学の正しい知識をわかりやすく懇切に解説した，学校教育，また，広く一般の人々への気象学入門書。
- 271 気象観測と天気予報：浅野 芳・原嶋宏昌：日本放送出版協会：1980：188p 気象観測や天気図の書き方を通して，気象の知識が自然に身につくよう，著者の長年の経験を生かして平易に解説。中学生・高校生の課外研究参考書，一般人の入門書としても適切な書。
- 272 カレンダー日本の天気：高橋浩一郎：岩波書店：1982：272p 朝日新聞朝刊の天気図の解説「きょうの天気」を下敷として，中学生・高校生の理科や社会科，国語などの学習にも役立てようと雨・風・雲・雪・気温・気圧・湿度・梅雨・台風・特異日・集中豪雨・異常気象など気象にかかわる話題をはじめ，宇宙・地球・動植物など，さまざまな情報を春夏秋冬の一日一日の話として楽しく語る歳時記。

- 273 新・日本のお天気12か月：清水教高・時田正康：アルス館：1987：229p 小・中学校の理科や社会科に天気問題が多く取りあげられたり，最近では中学・高校・大学入試にも本書にあるような，天気についての問題が多くなった事情も考慮に入れ，天気を理解し，気象への興味がわくよう図表，写真を多用してわかり易く説明。
- 274 気象なんでも百科：高橋浩一郎：岩波書店：1984：214p 気象に関する103項目を写真や図，グラフなどを多く入れて解説。中学校や高等学校の教科書に出てくるもの，毎日身近に見られる気象・レーダー・ひまわり（気象衛星）・アメダスなどの新しい観測に関するもの，近年世界的に関心を持たれている異常気象や人工気象など，広い範囲にわたっている。
- 275 気象業務関係法令集—昭和61年版—：気象庁：日本気象協会：1986：139p 気象業務法・気象業務法施行令（政令）・気象業務法施行規則（省令）・気象庁組織規則（省令）・災害対策基本法・大規模地震対策特別措置法・同施行令・活動火山対策特別措置法など，気象庁が行なっている業務の法的根拠を初めて一般の人々に公開した書。

### 気候・気象・地象（火山や地震）に関する基礎的知識修得を対象

- 276 新版気象学概論：山本義一：朝倉書店：1976：244p 大気・放射・大気の熱力学・降水の物理・大気の大循環・気団と前線・天気予報などを主な内容とし，高校卒程度の学力を前提として最新の知見をもとに書き改められた定評ある書。
- 277 気象力学通論：小倉義光：東京大学出版会：1978：260p 日々の天気や気候の変動は，いずれも大気の流れの変化に結びついているという主張。大気の流れを初等的な物理学と数学の言葉を用いて記述し，気象学の原理を明らかにしている。
- 278 一般気象学：小倉義光：東京大学出版会：1984：328p 観測方法や基礎科学の飛躍的發展で，大気科学と呼ばれる学問が成立しているが，この新しい成果を気象学という身近な科学に引き寄せ，書き下ろされた入門書。ユニークな発想で気象・気候学へのアプローチを示す。
- 279 天気図の四季—天気図の型と天気変化—：松本 幹：日本気象協会：1984：195p テレビや新聞の天気図に興味があり，そして，もう少し詳しく天気図を読みとりたいといった人を，また，ラジオの気象通報によって天気図を自作したい人をも対象として書かれている。さらにテレビ，新聞を通して気象衛星「ひまわり」画像がなじまれてきたという新しい事情にも配慮がなされており，日常的に利用できる赤外画像中心の説明も付されている。
- 280 気候学・気象学辞典：吉野正敏・河村 武・新田 尚他編：二宮書店：1985：742p 気候学・気象学は，地球科学の諸分野のうちで，人間生活とのかかわりがもっとも密接な分野であるという視点から，気候および気象に関する専門用語のほか，関連の深い地理学，農学，林学，工学，水文学，土壌学，民俗学等の隣接諸科学の術語，さらに公害，疾病，産業など広範な応用分野も含めた学際性豊かな内容で，3732項目が収められている。
- 281 気候学入門：水越允治・山下脩二：古今書院：1985：144p 気候の成り立ちとその表現・人間と気候環境（気候が人間に，人間が気候に及ぼす影響）・気候環境の創造という内容で，気候をどう考え，理解するのかを，熱収支論の立場から平易に解説。
- 282 気象と地震の話：吉武素二・増原良彦：大蔵省印刷局：1986：220p 気象庁の業務，気象・地象（火山と地震）・水象（海洋と陸水）のなかから，雨のはなし・風と大気のは

なし・天気予報のはなし・気象災害と異常気象のはなし・くらしと気象のはなし・地震と火山のはなしという分野に整理した100項目を一般の人々に知ってもらうよう編集した問答式の政府刊行物。

**283 NHK 最新気象用語ハンドブック：日本放送協会編：日本放送出版協会：1986：254p**

最近の情報化社会としての発展は放送の気象用語にも変化をもたらすのは当然で、用語のもつ意味の解説も改めて必要となる。本書は気象用語の内容を詳しく解説していること、地震・火山関係も含めたこと、など新しい問題を付け加えた心くばりが行われている。

**284 火を噴く日本列島—日本の火山を診断する—：諏訪 彰：講談社：1965：221p** 国民の一人

一人が火山の知識を持ち、噴火の災害を防ぐために協力してこそ、火山国において安らかに豊かな生活が約束されるということが本書の意図。火山の基礎と噴火対策の確実な知識を学ぶための適切な書。

**285 日本の地震：藤井陽一郎：新日本出版社：1984：204p** 地震予知はどこまで可能か、地震災害を防ぐためのポイント、そして日本の主な地震を歴史的にたどり、地震発生のメカニズム、プレートテクトニクス、活断層、観測と予知、防災対策など、地震の基礎知識を平易に解説。

## あ と が き

本稿は、第1報（名古屋女子大学紀要、第27号、1981）、第2報（名古屋女子大学紀要、第32号、1986）につづき日常生活に利用される気候・気象に関する文献（単行本）100書目の収書と文献検索を行った中から、紙面の制約上85書目を選択して作成した文献目録である。

85書目は、次の8分野に分類・整理してある。

- (1) 生活一般・産業と経済（経営）・衛生（健康と疾病）・レジャー等を対象とした文献。
- (2) 異常気象・気候変動・気候変化と人間の社会生活との係わりを対象とした文献。
- (3) 気象災害・地象災害と防災を対象とした文献。
- (4) 気候・気象に係わる文学（随筆も含め）や歳時記。
- (5) 気候・気象の歴史に関するもの。
- (6) 世界と日本の気候誌。
- (7) 気候・気象の調査・教育・行政を対象とした文献。
- (8) 気候・気象・地象（火山や地震）の基礎的知識を得るための文献。

世界と日本の気候誌・気候と気象の調査・教育は新しく補充した分野である。なお災害に関しては第3報から独立の分野とした。

各文献利活用の便を考慮して85書目すべてに解題あるいは内容紹介が行ってある。

## 文 献

- 1) 石田竜次郎、吉野正敏：地理学研究のための文献と解題、51～64、古今書院（1969）
- 2) 大矢雅彦：地理、25・第1号、19～27（1980）
- 3) 谷治正孝：地理、32・第3号、88（1987）
- 4) 谷治正孝：地理、32・第5号、102～105（1987）
- 5) 井上啓男、広 正義：名古屋女子大学紀要、27、255～265（1981）
- 6) 井上啓男、広 正義：名古屋女子大学紀要、32、99～109（1986）
- 7) 日本書籍出版協会：87年版日本書籍総目録（書名編）、日本書籍出版協会（1987）
- 8) 関根勇八、酒井俊二：気象情報の利用—新しい応用気象学—、20～34、東京堂（1987）